

『新しい日本語』

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

10年ぶりに改訂され、先月発売された『広辞苑第7版』がテレビニュースの話題となっていた。普通版が9000円。字を大きくし、2冊+付録の計3冊を1組みにした机上版は1万4000円。付録も入った箱の厚さは10センチ、重さはなんと3・3キロの書籍が平積みされたコーナーから飛ぶように売られている図柄であった。

とはいえ、さすがの『広辞苑』も販売部数は減っている。インターネットで言葉の意味も類語も簡単に検索できる時代の「紙離れ」は止められないのであろう。発行部数は第4版で220万部、第5版で100万部、第6版では50万部。一方、今回の第7版は「今年6月までに20万部が目標」という。

『広辞苑』の大きな特徴は「定着した言葉だけを選ぶ。最先端の言葉を勇み足で採用しない」という点だ。

そこで、毎回の改訂で話題となるのは、時代を映した現代語の追加である。実際、今回の第7版で新たに収録することになった項目は、「いらつと」「上から目線」「お姫様抱っこ」「口ばく」「小悪魔」「ごち」「婚活」「自撮り」「勝負服」「乗り乗り」「無茶振り」などがある。

そして、10年前の第6版改訂時に収録が見送られたが、今回、十分に定着

したと判断され、収録されることになったものは、「エントリーシート」「がつり」「クールビズ」「コスプレ」「モラルハラスメント」など。

逆に、今回も見送られたのは「アラサー」「アラフォー」「アラファイフ」「がん見」「ググる」「つんでれ」「デイスる」「ほぼほほ」「ゆるキャラ」などだ。

その他、3216ページ内に収録される約25万語のうち、基礎語や日常語から外来語、専門語、そして新語や地名、人名までと、なんと約1万語が今回の新規収録分だと知ったが、注目される言葉に限れば、馴染みはあるものの、いずれも何だが軽い口語でユーモラスである。

そこでユーモア(英・humour、独・Humor)を広辞苑風に述べると、人を和ませるような「おかしみ」のこと。日本語ではこうした表現を諧謔(かいぎやく)とも呼ばれ、「有情滑稽」と訳されるそう。

生まれて初めて目にした、なんとも難しい用語だが、ユーモアの明確な定義は実に困難であり、19世紀のイギリス文学や演劇界における古典主義への抵抗から、多くの作家や哲学者が定義を試み、解説し解釈しようとしていることも知った。

とはいえ実際のユーモアは、特別な文化人に限らず、普通の人々が日常の人間同士のコミュニケーションを図る際に、相手を和ませ、会話を弾ませるために用いられるものであり、大勢の人々を相手に話す時など、聴衆を和ませ、場の空気を和らげるために用いられるところであろう。

広辞苑掲載は、絶対的な日本語として認められた、これらの言葉の群れ、既にナウくもないが(収録不明)、いずれも不愉快なものではなく、軽妙なコミュニケーションシヨントールとなれば楽しいところであろう。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/> 名古屋甲状腺診療所(名古屋分院) <http://www.kojin-kai.jp/nagoya/> さっぽろ甲状腺診療所(札幌分院) <http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

